

二〇二四年度 樟蔭中学校 入学試験 問題用紙（A入試） 【国語】

二〇二四年一月十三日 実施 解答は解答用紙に記入すること。 「四枚のうち その二」

【一】 次の文章を読み、後の問に答えなさい。

「僕」と和美は二十四歳で結婚し、その当初、相模新町という各駅停車しか停まらない街に住んでいた。和美は余命宣告を受けており、闘病生活が続くある日を境に「シンマチに行ってみたい、外を歩けるうちにシンマチに帰っておきたい」と言いつのるようになる。「僕」は医師に相談し、医師からも「これが最後の外出になってしまいかも」という言葉とともに許可をもらうことができた。その一場面である。」

和美を連れ去ろうとする神さまには、そこまでのサービス精神はないのかもしれない。

そりやあそうだよな、あんたは意地悪な奴なんだから、（あ）残酷な神さまなんだから……。

心の中で毒づきながら切符を改札機に通すと、なにかの不具合か、ゲートが閉じて通せんぼをされてしまった。

「あーあ、もう、なにやってんの、カッコ悪ーう」

和美は、おかしそうに笑った。

駅前は見違えるように（い）セイビされていた。①客待ちのタクシーが三台停まれば一杯になっていた駅前広場は、中央に花壇を設えたロ―タリーになり、駅舎に隣接したバスターミナルもつくられた。

「ここ、前はなんだったつけ」

「やだ、忘れちゃったの？ 『マーケット』だったじゃない」

「ああ……そうか」

バスターミナルのある場所は、かつては戦後の闇市の面影を残す市場だった。迷路のように入り組んだ路地に間口の狭い小さな店がぎっしり並んで、地元のひとからは『マーケット』と呼ばれていた。魚屋の隣に洋品店があり、ベビー用品の店と向かい合って焼肉屋がある、よく言えばおもちゃ箱のような、② 言い方をするならでたらめな、そんな『マーケット』に、僕たちはしょっちゅう買い物に出かけていた。

「安かったよね、とにかく」

「うん、安かった」

『繁寿司』だっけ、あそこなんかイカゲソが一貫三十円だったでしょ。あと漢方薬のお店……ほら、夕方になると薬煎じて、すっごいにおいだったじゃない」

「名前なんだったつけ、なんとか堂って言ってたよな」

「あとね、あと、ほら、焼鳥の屋台みたいなお店があったじゃない。たまーに二人で行って、焼酎の梅割りとか飲んで、あなた一回悪酔いしちゃって大変だったの覚えてる？」

『「こうちゃん」だろ。あそここの焼酎、ホワイトリカーなんだから。梅酒つくる酒をそのまま出すだもんなあ、悪酔いするって」

「でも安かったじゃない。一杯百五十円くらいで、焼鳥も一本五十円とか六十円とか……ケンとかダイがいたら、もう焼鳥だけ食べる毎日通ってるんじゃない？」

子どもたちのことが、初めて話に出ていた。意識して遠ざけていたわけではないが、登校する二人――健哉と大輔を見送ったあとはずっと、子どもたちの生まれる前の話しかしていない。

和美は『マーケット』にあった店を何軒も挙げていった。ポテトサラダが安くて美味かった（う）総菜屋に、カレーパンがお目当てだったパン屋、マグロがやたらと安かった魚屋、（え）偏屈そうな親父が奥に座っていた時計屋、演歌のポスターが店じゅうに貼ってあったレコード屋、チマチヨゴリのおばあさんがいつもおまけしてくれたキムチの（お）ハカリ売りの店もあったし、その隣の（か）ザツカ屋では、二人でお揃いのキーホルダーを買った。

「よく覚えてるなあ」

驚いて言うと、和美も「うん、自分でもびっくりしてる」と意外そうに応えた。「でも、ほんと、その気になったら地図でも描けちゃうかもしれない」

ふだんは『マーケット』の思い出話などしたことはない。子どもたちの前でも、夫婦二人きりのときにも。

「不思議だよね、いままでべつに、懐かしいなあ、とか思ってたわけじゃないの」

僕だってそうだ。

「でも、浮かんできくの、お店の様子とか、おじさんやおばさんの顔とか」

③わかるよ、と僕もうなずいた。

二〇二四年度 樟蔭中学校 入学試験 問題用紙（A入試） 【国語】

二〇二四年一月十三日 実施 解答は解答用紙に記入すること。 「四枚のうち その二」

発車時刻を待つバスが整然と並んだターミナルに、ごみごみとした『マーケット』の名残を感じさせるようなものは、なにもない。それでも。

いや、だから——なのだろうか。

和美は「④懐かしさっておもしろいよね」と言っ、おとし出かけた中学校の同窓会の話をした。幹事が熱心に名簿をつくったおかげで八割近い出席率だった同窓会で、いちばんおしゃべりが盛り上がったのは、最後まで連絡先がわからずじまいだった数人の友だちの思い出話をするときだったという。

「その場にはいないひとの悪口を言うとか、そんなのじゃないの。」「A」、ほんとうに懐かしくて、中学時代はべつに仲良しじゃなくても、いろんなことをみんながどんどん思っだしていくんだけど……」「B」本人が同窓会に来てたら、意外とそこまで懐かしくなかったかもしれないって気がするのよ」

実際、出席した友だち同士の会話は近況報告がほとんどで、昔の思い出話は「ああ、あったね、そんなこと」程度で終わってしまったらしい。

「他の同窓会のときも、いつもそうなの。会えないひとの記憶はどんどんよみがえってくるのに、目の前で会っていると、いまの話しかないの。なんなんだろうね、それって。せつかく二十何年ぶりに会ったのに、デパ地下のお店の話とか美容院の話で終わっちゃうのって、もったいないっていうか、ばかしいっていうか……家に帰ってから、もっといろんな話すればよかった、って後悔するんだけどね」

「うん、」「C」、俺も同じだよ、そういうこと。やっぱり『いま』の話のほうが大事なんだよ、みんな……」

口をあわててつぐみ、⑤奥歯を噛みしめて、つづく言葉を喉に押し戻した。

だが、和美はおだやかに微笑んで、僕の代わりに言った。

「生きてるんだもんね」

「D」よけいな気づかいを押し返すように、「それはそうだよね、生きてれば時間はどんどん前に進んでいくんだから」と笑みを深める。

「うん……そうなんだよ、うん」

「いま言われてわかったんだけど、ほんとうだと思う、それ。同窓会に来なかったひとの思い出話をするときって、みんな、死んじやったひとの話をしてるみたいだったもん」

僕は黙ってうなずいた。譬えをそこまで持つていくつもりはなかったが、確かに和美の言うとおりなのだろう。

駅前の『マーケット』は、いまはもう影も形もない。現実の世界から姿を消してしまったからこそ、僕たちの記憶の中で永遠に生きる——というのは、ちょっときれいに話をまとめすぎているだろうか？

和美は歩き出しながら言った。

「まあ、でも、きれいになくなってるのって、かえってすっきりするね。あのまま『マーケット』が残ってても、十八年分古くなってるわけだから、もう、すごいことになってたんじゃない？ さびれて廃墟みたいになったのを見るより、ずっといいよ、⑥このほうが」

「うん……」

バスが一台、ターミナルから出発した。

入れ替わりに、別の路線のバスがターミナルに入ってくる。

「あそこにいたひとたち、みんなどこに行っちゃったんだろうね。どこか別の場所でお店やってるのかな」

「みんな、いい歳だったから、もう隠居してるかもな」

「い」

「そう……」

「ろ」

「そうだよ、たぶん」

「は」

「うん……絶対に」

⑦オウム返し of 僕の言葉を満足そうに受け取った和美は、「⑧やっとなかった」と立ち止まって笑った。「なんで相模新町に行きたかったのか、いま、理由がわかった」

「なに？」

二〇二四年度 樟蔭中学校 入学試験 問題用紙（A入試） 【国語】

二〇二四年一月十三日 実施 解答は解答用紙に記入すること。 「四枚のうち その三」

「あのね、昔と同じものに再会したいわけじゃないんだな、って。逆に再会できないほうがいいっていうか、もう会えないんだっていうことを確かめたっていうか……みんな幸せにやってるよね、って言いたいんだよね、要するに」

自分の言葉に照れたように、途中から早口になった和美は、それだけではまだ照れくさを消しきれなかったのか、⑨を探しに、さあ、行くぞーっ、おーっ」と右腕を前に突き出した。

その腕が曲がって、小さなゲンコツが僕の胸にぶつけられる。オーバーの袖から、細い手首と、⑩筋張って骨の形が透けた手の甲が覗く。「思い出話、たくさんしろよー、ケンとダイと三人で」

胸にぶつけたゲンコツを、和美はひっこめなかった。

「ママは幸せにやってるんだなって、意地でも言えよー、おまえ親父なんだからなー」

僕は和美のゲンコツの上に自分の手のひらを重ねた。かさかさに乾いた手の甲になにかを擦り込むように、ゆつくりと撫でた。

（重松清『その日のまえに』）

問一 二重傍線部（あ）ゝ（か）の漢字は読みを、カタカナは漢字を答えなさい。

問二 傍線部①について、（１）（２）がかかる語句を記号で答えなさい。

（a）客待ちのタクシーが三台（b）停まれば一杯になっていた（１）駅前広場は、中央に（c）花壇を設えたロータリーに（d）なり、
（2）駅舎に（e）隣接したバスターミナルも（f）つくられた。

問三 ②について、ここに入る「直接すぎて、話の続けようがない」という意味のことわざを次の中から選んで、記号で答えなさい。

ア 歯に衣着せぬ

イ 高をくくるような

ウ 身も蓋もない

エ 目から鱗が落ちる

問四 傍線部③について、僕はなぜうなずいたのですか。理由が正しく書かれた文を次の中から選んで、記号で答えなさい。

ア 日頃から「懐かしい」と思い続けている『マーケット』を訪れ、その話をしていると今まで以上に懐かしいという気持ちが込み上げるから。

イ 日頃から「懐かしい」と思っている『マーケット』について、その場所にいるといつも以上に懐かしさを感じ、その場から離れたくないと思うから。

ウ 日頃あまり「懐かしい」と思うことがない『マーケット』について、その場所にいると懐かしいと思っていたことを思いだして少し泣いてしまうから。

エ 日頃「懐かしい」と思ったことがない『マーケット』について、懐かしさを感じるものはないにも関わらず、その場にいると懐かしいと強く思うから。

問五 傍線部④について、和美がそう語る理由を二十五字以内で答えなさい。

問六 「A」ゝ「D」に入る言葉を次の中から選んで、記号で答えなさい。

ア でも イ ただ ウ もし エ そして

問七 傍線部⑤について、僕がこうした理由を次の中から選んで、記号で答えなさい。

ア 妻の和美が余命宣告をされているのにも関わらず、会えない人の話の方が面白くて盛り上がると思ったから。

イ 妻の和美が余命宣告をされているのにも関わらず、生きていることの方が大事と言ってしまったから。

ウ 妻の和美が余命宣告をされているのを忘れて、死んじやった人の話をしてしまったから。

エ 妻の和美が余命宣告をされていることを忘れて、同窓会のたとえ話をしてしまい、後悔したから。

問八 傍線部⑥について、この語が指し示す一文を二十五字以内で抜き出さない。

問九 い・ろ・はに入る会話の内容文を次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア みんな幸せにやってるよね、ね？
- イ 絶対に
- ウ 幸せな老後？

問十 次の一文は、傍線部⑦の「オウム返し」の意味を表した一文です。 ①・②に入る言葉を選んで、記号で答えなさい。

- 【 ①の言ったことを ②返すこと。 】
- ① ア 母 イ 友達 ウ 相手 エ 自分
 - ② ア そのまま イ 適当に ウ しつかり エ こっそり

問十一 傍線部⑧について、何がやっとわかったのですか。「〜ということ」に続くように、その内容を指し示す箇所を三十五字以上四十字以内で探し、初めと終わりの五字を答えなさい。

問十二 ⑨に入る内容を、次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 消えたもの イ なかったもの ウ 懐かしいもの エ 消えないもの

問十三 傍線部⑩について、このことが表している事実を次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 和美の病気が進行し、体はやせ細り、和美の死期が近いことを表している。
- イ 和美の病気は進行しているが、もともととの和美の手が細かったことを表している。
- ウ 和美の病気がよくなり、旅行が終わったら病気が治っているという未来を表している。
- エ 和美の病気が僕にも感染し、二人ともそう長くは生きられないことを表している。

【二】後の問に答えなさい。

問一 次の慣用句が（ ）内の意味になるように、空欄に体の一部になる語を入れて完成させなさい。（すべて漢字を用いること。）

- ① （ ）もあや （まばゆいほどに立派で美しい） ② （ ）に掛ける （自慢する）
- ③ （ ）が堅い （他言しない） ④ （ ）に挟む （ちらっと聞く）
- ⑤ （ ）が出る（赤字になる）

問二 次の【 】内の語と同じ働きをする言葉を次の中から三個選んで、記号で答えなさい。

- 【 いる 来る なる 】
- ア 赤い イ 同じ ウ ある エ ない オ 静か カ 歩く キ 見る ク よい ケ 無理

問三 次の四字熟語の（ ）に入る漢字を、次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ① （ ）心伝心 ② 一（ ）一会 ③ 外柔（ ）剛 ④ 我（ ）引水
- ⑤ （ ）飲馬食 ⑥ 山（ ）水明 ⑦ 臨機（ ）変
- ア 期 イ 応 ウ 青 エ 内 オ 以
- カ 田 キ 紫 ク 牛 ケ 多 コ 宇